

## 運営指導協議会 記録

### ○第1回

- 1 日時 平成27年7月17日(金) 13:30~15:00
- 2 場所 千葉県立成田国際高等学校 1年H組教室
- 3 次第
  - (1) 開会の言葉
  - (2) 千葉県教育委員会挨拶
  - (3) 学校長挨拶
  - (4) 運営指導協議員および千葉県立成田国際高等学校担当者紹介
  - (5) 会長・副会長選出
  - (6) 会長・副会長挨拶
  - (7) 協議
    - (ア) 千葉県立成田国際高等学校 SGH 構想について
    - (イ) 平成27年度事業計画(案)について
    - (ウ) 質疑応答および指導助言
    - (エ) その他
  - (8) 諸連絡
  - (9) 閉会の言葉

### 4 協議記録(質疑応答および指導助言)

(協議員) 課題解決型授業に割く時間はどの時間内に行うのか?

(担当者) レジューメ3ページを参照。新たな学校設定科目を設置し、1~2学年でそれぞれ週1時間必修。

(協議員) 生徒の課題テーマ選択については、教育・観光・環境の分野で人数が偏ってもいいか?

(担当者) 特にこちらから課題選択の強制は行わない。4月時点での事前調査では観光:46%, 教育:29%, 環境:25%の生徒がそれぞれ希望した。

(協議員) 課題を選択した後、途中で変更はできるか?

(担当者) 一度決めた課題は継続する。

(協議員) 課題研究は4人グループで行うとのことだが、学級の枠を超えて行うのか?

(担当者) できる限り各自が希望する課題の内容に近い生徒でグループを編成したいので、学級の枠を超えてのグループ編成を検討中。

(協議員)「教育・観光・環境」という課題研究テーマを設定した理由は？

(担当者) どの分野もグローバル化の進展に伴い大きく形が変わってきており、新たに  
対応していかなければならない分野で、高校生が取り組みやすいものであること。  
また成田の地域性を考慮して設定した。

(協議員) 同感。生徒がそのことを認識しているといい。将来、社会でこの 3 つの分野  
に関わる可能性が高いと認識させる必要性があり、その結果生徒の課題研究への取  
り組み方が変わるのではないか。

(協議員) 課題研究の実施そのものが目的ではなく、課題研究を通して 7 つの資質・能  
力を育成することが目標とすると、その評価はどのように行うのか？

(担当者) 評価方法については現在検討中。

(協議員)「プロジェクト型アプローチ」というキーワードで、intel 等が開発している。  
オンラインで参考にできるものもある。

(協議員) 取組の成果をこの学校だけで終わるのではなく、他の学校も参考にできるよ  
うに、どうだったら成功、どうだったら失敗だったのかの判断を何とするのか、主  
観的なものではなく、もう少し突っ込んだものが求められる。またどういう人間が  
育つのか、着地点となる目標を具体的にする必要がある。

(学校長) 評価については千葉大学と連携して方向性を探っていくことを考えていき  
たい。

(協議員) 何をどのように評価するのか、あるいは目標を具体的にはっきりとさせるこ  
と。そのようなことを SSH の発表では聞かれた。

(協議員) プロジェクト型学習、またその評価は世界中で行われている。例えば、プレ  
ゼンテーション能力を評価するのであれば、ルーブリックを活用した評価などを行  
う。生徒にその力がついたか評価するものと、事業そのものを評価するルーブリッ  
クの 2 種類。数値で図るのは難しいので、これができたらこの段階、これができ  
たらこの段階などのように、段階で評価するのが一般的。

(協議員) 予算について。事務にとっては予算が増えた＝違う仕事が増えた＝それだけ増えた  
ということ。SSH の時には、予算で事務的なことを行う職員を雇ったが、今回はその  
ようなことを考えているのか？

(事務長) SGH の予算に関しては、国→県→学校の流れで、直接国とやりとりできない  
のが SSH とは違うところ。補助は雇っているが、その方に全て SGH のことを任せ  
ることは事実上難しいため、事務職員の負担は増えている。

(協議員) 中心になって行う先生は負担が増えるため、授業を減らすなどの措置が必要。  
個人プレーでは対処できないので、みんなで負担を分け合うか、新しい職員を増や

すなどして物理的に仕事を減らす。

(指導課長) SGH 指定の仕事は県庁全体での仕事であり、申請の段階から行ってきた。

教員の加配は行ったが事務のことは来年度以降の課題。

(学校長) 県には来年度以降も引き続き全面的な協力をお願いしたい。

## ○第2回

1 日時 平成27年11月4日(水) 14:00 から 16:50

2 場所 千葉県立成田国際高等学校 国際交流棟 第1・第2研修室

3 次第

(1) 開会の言葉

(2) 千葉県教育委員会挨拶

(3) 学校長挨拶

(4) 協議

(ア) SGH 事業にかかわる中間報告

①海外フィールドワークの下見報告

②国内フィールドワーク実施計画

③課題研究基礎に係わる研究テーマ

(イ) 質疑応答および指導助言

(5) 課題研究基礎(第7限)授業見学

(6) 授業見学にかかわる指導助言

(7) 諸連絡

(8) 閉会の言葉

4 協議記録(質疑応答および指導助言)

(協議員) フィールドワークに行く前に自分の取り組むテーマを決めてあるのか。最初に決めておかないと、課題解決につながるような情報を仕入れられないのではないか。

(担当者) 今年度の計画は4月から始まったばかりで、国内フィールドワークも11月に実施するので、自分のテーマを決めることと接続はうまくいっていない。今回は国内フィールドワークでヒントを見つけ、それを手がかりとして課題研究のテーマを見つけていくということを目指とした。それを来年に生かしていきたい。

(担当者) たとえば東京オリンピックを題材として、イスラーム教徒たちがたくさん来日することから想定できる課題がある。そういうことをどのように解決していくかと考えた方が、イメージしやすいのではないか。

(担当者) 海外については来年8月に実施予定なので、今の1年生は年明けにかけて自

分のやることを特定して狭めていくので、来年 8 月に海外フィールドワークに行く頃には自分の課題意識はかなり堅いものになっていると考える。

(協議員) 高 1 レベルでは、国内フィールドワークでは漠然とした課題を持って行き、さらにその課題を明確化するというスタンスでよい。そこでヒントを得てかえって来るということでもよい。海外フィールドワークに行く生徒と残る生徒との関係も大事である。残る生徒の課題も託して行くことで、生徒同士の関係も作れる。

(協議員) フィールドワークをやって報告をすることで、次の学年にもつながる。人材を育成するのが主であるからきちんとした答えを出そうとしなくてもよい。

(協議員) 行ってみて発見する。現地で何が課題となっているかを発見しに行く。その中で自分がどれをテーマにするのか、見つけてくるのもよい。

(協議員) 大学との連携はどうなっているか。

(担当者) 千葉大学国際教育センターに研究指導の進め方、研究のあり方、質的研究のやり方など相談している。

(協議員) いろんな分野でのグローバルリーダーになるにも、その前に大学進学がある。偏差値だけで決めるのではなく、自分の興味のあることを研究できる分野の大学に進学したい生徒にたいし、大学への橋渡しをするのが大切。自分の進路に対し明確な希望を持って大学を選択していくということを進路指導の現場で実感できれば、それが生徒たちの勉強するモチベーションにつながる。学習成果につながったという担当者としてのストーリーが描ければ、他の先生方の協力も得やすいのではないか。

(協議員) そういう進路を実現させた先輩を担当者に招いて、大学に行ってもこのような研究をしているという話をしてもらったりすると、生徒も聞いて関心が高まるし、高大連携にもつながる。

(協議員) 海外フィールドワークに行く 15 名とその他の生徒との関わり、調査研究してくる生徒の得たものを、経験ができなかった生徒にとってもどのようにして財産とするかが、課題である。

(担当者) 予算の関係で個人の持ち出しはある程度してもらえない。どのように 15 名を選んでいくかも課題。

(協議員) 海外修学旅行とフィールドワークを結びつけている高校もある。

(担当者) 本校では毎年 3 月に約 40 名の希望者による語学研修をしている。

(協議員) 海外から帰ってきてから学校でどう生かされていくかが大切。ただの発表会で終わらせないためにも工夫が必要。

(担当者) 課題研究は 1~2 年生は全員対象であるが、3 年生は選択となる。海外に行く 15 名は 3 年で GS 課題研究を選択することが条件である。3 年生では英語で研究発表もすることになる。また、2 年生が修学旅行で台湾に行っている間に 1 年生普通科は城西国際大学の留学生を招いてのセミナーを実施している。

(担当者) 今年度のセミナーはあらかじめ相手の国を調べ、日本の文化の紹介も含めプレゼンをし、時間があれば日本のカルタ・けん玉などで遊び交流した。

(協議員) 10年、20年先のグローバルリーダーを目指す上で、目標となるようなものがあるか。

(担当者) 大学で少しずつではあるが、発表大会もやり始めている。

(協議員) SGH 同士で発表する機会はでてきているか。

(協議員) 進学するときにもアピールできるようなことがあるとよい。

(担当者) 近隣の SGH とお互いに発表しあう機会があるとよい。

(協議員) 指導方法の確立が課題。教員が自分の専門外の分野については不安になり、それが抵抗感につながる。方法は2つある。1つは時間が解決する。モデルができると不安感がなくなり自分自身でも活動を楽しめるようになる。もう1つはモデルをつくってしまうこと。それを示すことで教員も安心できる。高校生としてここまでできる、あるいはやらせたいというのを、先生方の感覚でつくっていくのがよい。

… [授業見学を終えて] …

(協議員) フィールドワークに臨む基本姿勢はよい。教えていただく場合、何でも事前に準備して質問項目を立てていくと往々にしてその答えに対して一生懸命メモをとろうとして受動的になりがち。質問して答えていただいたことに対し、必ず追加の質問をする(突っ込みを入れる)と、新しく聞いたことに対して心を開いて聞くことになるということ、アドバイスをしてほしい。

(協議員) 各課題は面白いテーマなので各自自主的に勉強してからいくとよい。インタビューするとき、メモをとるにも今は iPhone やレコーダーなどあるので、事前に許可を取って利用すると、心配せずに後から振り返って深く考えることができる。

(協議員) 国内フィールドワークの後の新聞の作成がポイントとなる。土地の紹介だけに終わらず、現地の人にとって何が問題なのか、そういう観点が最低一つ入っているとよい。優秀な作品だけを張り出すのではなく、むしろ全部張り出すと、いろんなところでいろんな気づきをしていろんな疑問を持って、その後の自分の課題を考える材料となる。

(アドバイザー) 生徒は一生懸命情報収集する。スマホやインターネットで最初に出てくるところのコピペにならないように、他のものからも情報収集するよう促してもらいたい。

(協議員) 課題研究の時の教員側の姿勢は、先生が教えるのではなく専門家(外部の人、大学の先生など)に教えてもらうようにつなぐようにしてほしい。ただメールのしかたやマナーについては指導するということは必要である。生徒たちが動き出せばそれでよい。